

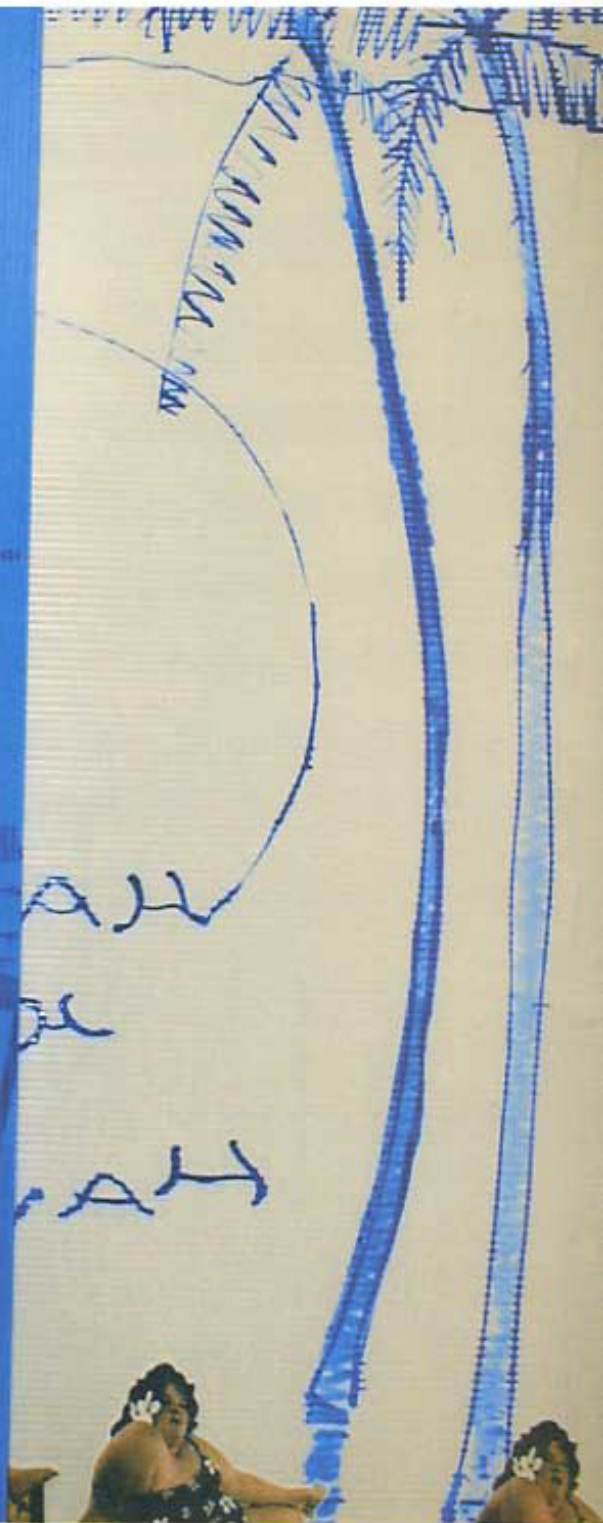
六 花

俳句雑誌

りつか

3

Designed by Tomoko Tanaka



訪 戴

山田六甲

耕しのでのひら熱くなつて来し
春の雪ロマンチックに降りやがる
名残雪目つきの悪い羊かな
風花は言葉たらずの言葉かな
ここからは下界と嘆く雪女
寒の鯉背なの唐獅子牡丹かな
何しても沈んでゆくか寒の鯉
放心のかたちに梅の匂ひてや

社町平池

下池の鴨上池へ移りたる
畦焼の走り火土手へ驀地
裸木の根元スコップ刺してあり
一匹の鯉の死に冴返るかな
睡蓮の枯れ尽くし風渡るなり
冬ざれや蓮の雑学掲示板
寒風やオリーブの木の背後から
暗い方へ考へのゆくかいつぶり
なずな咲くぺんぺん草も生えぬ場所
いとほしき目をして寄るよ春の鴨
夢中とは夢の中なり牡丹の芽

無鑑査同人作品

六 卿 集

(五十頁送り)

宇宙とは

松山 律子

古雛に見張られて居て世の静寂
芽ぐむもの QRコード進化中
啓蟄の勝手気儘に生きてます
天涯に父母なし 蝶のひらひらと
百二十八億光年・春になる

牡丹焚火

小田 元

住職の櫓組む早さ牡丹焚
 天平の焰あがりし牡丹焚
 牡丹焚炎あがりて牡丹の香
 牡丹供養中将姫の像匂ふ
 匂ふとか彩あれこれと牡丹焚

尾 花

梶浦玲良子

寒木へ 研の 帰る 檜 風 呂
 北下ろし木簡口説きはじめたる
 月あやしあやし尾花の枯れにけり
 骨箱を抱くやひしと冬の霧
 冬もみぢ号外ぬれ葉となりにけり

霜
木内美保子

切れさうな縁を繋げて賀状書く
己が背に嘴乗せて鴨の夢
行く年や句屑捨てたり拾つたり
でこぼこの轍の跡の霜柱
霜解けて青蘇る野菜畑

つまむ
中村房枝

門川の水のきほひや桃の花
牛のほほ撫でて歩ます春祭
稚鮎なまこや父の郷里に父の墓
寝よ寝よと雨の音して春障子
香具山をつまむ指欲し目借時

草の絮
鳴海清美

筆塚の彫の深みへ草の絮
黄落や轍伝ひに海辺まで
餌場へと崩れて濠の鴨の陣
茶の花や日溜りに猫畏まり
枯葎犬の落せしものを踏み

日本晴れ
二瓶洋子

仏壇に父の勲章文化の日
暮れてなほ雲厚くして文化の日
明治節きつと日本晴れなりき
惚けたる芒の茎の真紅かな
藤の実が胡桃の樹よりぶら下がる

住所録左手で繰り賀状書く

ことり

崩したる足の触れ合う雪見そば

晴天に放り上げたる雪礫

無記名でポインセチアを送らるる

汚れても雪は雪なり空青し

賀状を書く仕草を、このように詠まれてみると、我々が常に経験していることを、文字にするという基本的な作業を忘れていたことに気づくのである。俳句にはこのような発見も大切だ。一枚でも多く、一枚でも早く書き上げたいという気持ちが読者に伝わってくる。

同人作品

檀木集

大年

信崎 和葉

大年の背中を母とさすり合ふ
みろりの火搔きて民話を続けをり
どこまでも日の走り行く寒林
十二月やせたる母の裁ち鋏
玻璃から玻璃へ青一色の聖樹

新米

佐原 正子

長兄の故郷新米噛みしめて
小指刺す棧のささくれ障子貼
示現寺や岩子辞世のすすき原
緩やかに色づいて来し銀杏の葉
温泉の肌すべすべとなめこ汁

初詣

武田 美雪

初詣おのれおのれと発光す
夫つまの躰規則正しく寒夜かな
極月の星なり願ひかけてみる
数へ日に紐くくりつけ豆を煮る
歳晩の酒の社の人熱いされ

菜根譚

穴甲

檀木集より

春立つと母の手紙の書き出しに

宮森 毅

宮森さんの母は九州で独り暮らしと伺っている。私の母も四国で独り暮らし。子供が五人もいながら誰言人として親の面倒を見ることの出来ない親不孝を詫げるほかないが、親も親で、呼び寄せようとすれば一人が気楽でいいと言っし、無理矢理呼び寄せて、返ってストレスを溜めて、それが原因で病気にでもなれば困る、とジレンマに陥るのである。宮森さんはどうか知らないが、ときおり帰省する作品をみるから、きつと私と同じような心境ではないかと、親近感を持つのである。(先月号で宮森さんの分が漏れていたのでお詫びして、ここに再録した。以下インフルエンザで体調すぐれず秀句抄出にておゆるしください)

小指刺す棧のささくれ障子貼

佐原 正子

極月の星なり願ひかけてみる

武田 美雪

手袋の手を大振りに土手を行く

田中 武彦

一病を忘れて久しシクラメン

中野 哲子

目潰しの術の如くに初日の出

西塚 成代

どこまでも我が家の落葉掃いており

馬場美智子

お好みの味に仕上げて歳の暮

松下 幸恵

消えつつも連なる泡や秋の川

松本文一郎

大根引くふるさに穴二つあけ

三井 孝子

啓蟄やばち捨てやう身の回り

水谷ひさ江

雛祭り折紙だけの祭の壇

宮森 毅

初鴨の首まうしろに御薬園

物江 昌子

(以下略)

会員作品

林 裕美子

六花集

ことり

立花かほる

崩したる足の触れ合う雪見そば
晴天に放り上げたる雪礫
無記名でポインセチアを送らるる
汚れても雪は雪なり空青し
住所録左手で繰り賀状書く

達筆の閉店のびら小六月
菓子食べぬ一日長し賀状書く
鼻風邪の猫に頼みしお留守番
ややこしき連絡の来て十二月
寄せ鍋や聞く耳持たぬ人ひとり
うしろから歩を重ね合ひ枯葉道
電車から我が家の見えて秋夕焼
鳥の餌となる前に挽ぐ柘榴の実
石榴の実弾けて母の傘寿なる
柗の花散らしたる夜雨かな